

## 迷路の中の神へ

### —エミリー・ブロンテの自己探求の軌跡—

大平 栄子

「幻を見る人」とは Emily 自身のことではないだろうか、と読者が直観するのは、Emily の 'Visionary'<sup>1</sup> という詩を読んだ時であろう。これは Emily 27歳の時の詩であるが、これよりも早い時期に Emily には幻視体験、あるいはそれに通ずるような体験があったということを指摘する研究者は少ない。例えば Phyllis Bentley は、Law Hill 滞在中に Emily の許を訪れたと思われる「幻」を 'a liberating power' として捉え、Emily の 'visionary life' がここから始まったとみている。<sup>2</sup> また Winifred Gerin は Law Hill 時代の体験に 'a profound spiritual experience' という表現を与え、自由を与える存在が「顕現」したことを仄めかし、その瞬間に訪れる 'ecstasy' を Emily は生涯求め続けることになったと述べている。<sup>3</sup> Law Hill 滞在中に書かれた Emily の詩には真夜中 'strange sensations' (No. 37, l. 14) に満たされ、'a sterner power' (l. 15) の訪れを予感するという内容をうたったものがある。<sup>4</sup> 19歳の時の Law Hill School の寄宿舎における体験が Emily に強い衝激を与え、Emily の人生を方向づけたことは明らかである。その後書かれた詩の多くにその影響を見ることができる。そして、そこには内体験そのものに限らず、それについての Emily 自身の解釈が様々なイメージとなって描き出されている。従って、Emily はこの体験を契機にその意味を解き明かそうと努めてゆく中で、解放する力をもつ存在についてのイメージや概念を形づくっていったのではないかと思われる。このように、Emily がその体験についての思索を深めてゆくそ

の過程を辿ることは、自由についての認識の深まりと同時に Emily の自己認識の道路を辿ることにもなると思う。Emily が「囚われていること」を最も強く認識したのは Law Hill 時代であった。従って、この時期、自由への希求が烈しく燃えあがったことは言うまでもない。その自由への欲望が 'liberating power' としての幻影を生じさせたのであろうと推測されるが、その体験の原因を問題にしようとした時、Emily は囚われている自己と自由への希求との関係に気づいたはずである。そこから、一体自分は何に囚われ、何から解放されたいのかという疑問も生じるであろうし、その疑問を通して知られざる自己を見出すことにもなったと思われる。事実、Emily は解放力をもつ存在をどこに求めうるか、あるいはどのような存在であるのかを問う中で自己自身の存在のあり方とその解放力（すなわち自由）との関係に光をあてることができたと思われる。それは Emily の後期の詩の示すところである。

従って、本稿では、19歳の時の体験によって Emily の内面では新たにどのような欲望が芽ばえ、それがいかなるイメージとなって詩作品に描かれているか、その体験の謎が明らかにされるにつれ、そのイメージはいかなるものに変化し発展していくのか、そしてそれは Emily の自由あるいは自由を与える存在についての認識の深まりをどのように反映しているのか、自由についての理解と自己認識とはいかなる対応関係にあるのかといった点について検討してみようと思う。

Emily の詩、特に自由への渴望が投影している詩には、'fancy' あるいは 'imagination', 'spirit', そして 'vision(s)' ということが幾り返し現われる。これらが 'liberating power' と密接に関っている image であることは疑いえないが、一体これらが何を表象し、相互にどのように関係づけられるのかについて検討しながら、上記の疑問点を明らかにしてゆきたい。

Winifred Gérin は、Law Hill 滞在中に Emily が書いた詩の調子はかなり 'nostalgic' なものではあるが、家と荒野への郷愁とは異なる他の欲求がすでに

Emily に取りつき始めた」と述べている。<sup>5</sup> 確かに、Gérin の指摘するように、この時期の Emily の詩には家と荒野の image とは異質なものが現われており、それは後に Emily 自身が 'liberating power' として受け入れ烈しくその訪れを待ち焦れる存在に発展してゆくものであらうと思われる。

次に引用する詩は Law Hill 滞在中 (1837年11月) に書かれたものである。

I'll come when thou art saddest,

.....  
Listen, 'tis just the hour,

The awful time for thee ;

Dost thou not feel upon thy soul

A flood of strange sensations roll,

Forerunners of a sterner power

Herald of me ? (No. 37, l. 1, l. 11-16)

「わたし」すなわち 'a sterner power' が暗い部屋で独り悲しみにくれている「あなた」のもとにやってくるという設定になっている。その訪問者が訪れる時、「あなた」は前兆として奇妙な 'sensations' に襲われる。これは、Emily が現実に、Law Hill School で体験した出来事に基づいて描かれていると考えてもよいであらう。訪れる時刻が 'awful time' と形容されていることからして、この詩人の体験が最初は必ずしも歓迎すべきものではなかったことがわかる。同時期に書かれたもう一つの詩 (No. 36) では、風が荒らぶる晩「わたし」は 'a tyrant spell' をかけられたために「あなた」の許に行くことができない、'I cannot go' という詩句が各連の終りに3度繰り返されている。これら No. 36 の詩と No. 37 の詩には何らかの関連性が認められるように思う。No. 36 では、「わたし」は「行くことができない」が、No. 37 の詩では、「わたし」は 'a tyrant spell' から解き放されて「あなた」の許を訪れることができると、読みとることも可能であるように思う。さらに他の Law Hill 滞在中の詩 (No. 45, No. 50) をあわせて考えてみると、詩人は 'a sterner power' (No. 37)、あ

るいは外で吹き荒れる風雨の中詩人の心にささやく 'something' (No. 45, l. 3) が訪れるのを恐れつつも待ちわびていることがわかる。ところが No. 37 の詩を除くと、いずれの詩においても、訪問者は 'spell' (No. 36, l. 3) をかけられていて来ることができず、あるいは 'chains' (No. 5, l. 1) に縛られて、じめじめした冷たい住処から抜け出して再び「わたし」を訪れることができないのである。

この詩人の待ちわびる訪門者とは一体何ものであろうか。'a sterner power' (No. 37) あるいは 'Memory has power as real as thine' (No. 45, l. 7) とあるように何らかの 'power' をもつものであることは明らかであるが、その力の作用によっていかなる変化を引き起こすのであろう。

後期の詩で、Edward Chitham が 'the visionary experience' あるいは神秘体験を明確に描写している詩 (No. 190) である<sup>6</sup>と述べているのを見てみよう。それは 'Silent is the House — all are laid asleep;' で始まる。静まりかえった家の中で独り「私」は 'Wanderer' (l. 8) あるいは夜毎冬の荒野をたどる「天使」(l. 12) を待ち焦れている。一方場面は変って牢獄となり、囚人 Rochelle は夜、西風と共に「私」の許を訪れる「希望の使者」が 'eternal liberty' を与えると告白する。'Wanderer', 'angel', 'A Messenger of Hope' と異なる呼称は与えられているが、これらが Law Hill 時代の内体験を契機に意識し始めた待ちわびる訪問者の類であると考えてよいであろう。また囚人 Rochelle の告白からこの訪問者が待ちわびる者を永遠に解放する力をもつものであることがわかる。それでは Emily にとって解放されるとはどのようなことであったのか、まず Law Hill 時代に書かれた詩の中からその当時の Emily の自由についての image を探り出してみよう。

I'm happiest when most away  
I can bear my soul from its home of clay  
On a windy night when the moon is bright  
And eye can wander through worlds of light——

When I am not and none beside—  
 Nor earth nor sea nor cloudless sky—  
 But only spirit wandering wide  
 Through infinite immensity. (No. 44, ll. 1-8)

これは最初の神秘体験あるいは無の体験を描いた詩としてしばしば指摘されるものである。「魂が土塊の身を遠くはなれる」ということは肉体的存在から解放されるということであり、Emily の自由の image はさらに、自由の身となった魂が「光の世界」や「無限なる世界」を翔けめぐるといように展開する。この詩には夜の訪問者という表現は使われていないが、それは、ここに描かれた体験を可能にする力を有していると思われる。つまり「無限なる世界」へと隔けこむために魂を「土塊の身」（これは後に人間の限界性を意味するようになる）から解放する力である。ここで注目したいのは、「眼は光の世界をさすらう」という表現を用いていることである。「光の世界」が物理的な視覚がとらえた世界でないことは明白である。この詩の1年ほど前にも、魂がわびしい牢獄から解放されるという内容をうたう詩が書かれている。この詩（No. 5）においては、自由になった魂は山や森や川や谷をかけ巡るのであるが、これらも解放された魂が映し出した光景であり、単なる視覚体験ではありえない。いかなる恍惚状態で見る風景であろうか。

Emily が恐ろしい悪夢や 'ghosts', 'visions' そして 'shadowy thing' (No. 12, l. 18) に夜悩まされた時期があったということに関しては、ごく初期の詩が示してくれる。また Law Hill への出発直前に書かれた詩 (No. 27) において、Emily は「子供時代の明るい時」から夢や 'visions' にとりまかれていた、とうたっている。Law Hill 滞在中の詩にも 'And think the fearful vision o'er' (No. 55, l. 4) という表現、あるいは Law Hill School 退職直後の詩にも 'Shadows come! What means this midnight?' (No. 63, l. 69) という表現がみられる。そして後に1838年11月5日の詩の中で 'Lost vision! ... / Thou canst not shine again.' (No. 86, l. 15) というように「失われたヴィジョン」を詩人

が嘆いていることを考えあわせると、いかに Emily が「幻」あるいは「幻の  
ようなもの」に深く関っていたかがわかるのである。それは、夜の訪問者のよ  
うに、最初は必ずしも歓迎すべきものではなく、むしろ Emily を怖れさせた  
のであろう。しかし朝の到来と共に追い払われたこの忌わしい「幻のようなも  
の」は、後に呼びもどされるものとなる。それがいかなるものであり、また  
Emily にとって意味づけがいかに変化しようとも、Emily が呼びかける 'pow-  
er' (あるいは待ちのぞむ夜の訪問者) との間には密接な関係があると思われる。  
また1839年1月12日の詩では 'a shadowy spirit' (No. 95, l. 24) といわれるも  
のが訪れたことを Emily はうたっているが、この spirit も「幻のようなもの」  
あるいは 'power' と少なからぬ共通項をもつ。

'O Dream, where art thou now?' (No.86, l. 1) そして 'Lost vision! 'tis  
enough for me —— / Thou canst not shine again.' (l. 15-16) とあるように、  
1838年11月5日の詩には、かつて輝いていた 'vision' や夢が今は失われ、再び  
呼び戻すことができないという嘆きがうたわれている。この 'vision(s)' が輝  
いていた過去とは、まだ自然を対象化せず、それに隔け合い同じ生命を息づい  
ていた頃、荒野の静寂や野を渡る風やそこに咲く小さな花がそこで屈託なく戯  
る者の心を開き、あるいは激しい感情を掻き立てあるいは「燃えるような空  
想」(No. 27, l. 17) で満たしていた幸福なる子供時代を意味するといつてよい  
であろう。この失われた 'vision' への嘆きは、失われた子供時代への烈しい郷  
愁の念と重なりあう。

ところが、いとおしいはずの 'vision' に対して 'false' という表現が、すで  
に1839年8月12日の詩 (No. 114) にみられるのである。昼は見ることのでき  
ない夢や空想、夢想にひたっていたいと願うのであるが、魂が味わう解放の歓  
びはつかの間のこと、幻想からさめた時にうける束縛、覚醒の苦痛を詩人は幾  
度も体験したのであろうか、Emily は 'a vision dear though false' (l. 11) と  
うたうのである。この 'false' という点においては 'fancy' も同様である。'fan-  
cy's power' (No. 92, l. 43) は懐しき思い出の風景を映し出し、見る者の心を

その労苦から解き放つが、その力にも限界があり、その映像はたちまちにして現実の力によってかき消されてしまうのである。この 'fancy' が 'visions' を導くというのであるから、'a vision dear though false' であるのも当然のことである。

19歳の時から Emily は 'Visions by ardent fancy fed' (No.27, l. 17) 「幻が燃えるような空想に導かれていた」とうたっている。そして27歳の時の詩にもそれを暗示するような詩句がみとめられるのである。「彼」すなわち「希望の使者」が風や星に刺激をうけて「わたし」の許を訪れる。そして「風はもの悲しげなる調べを奏する」のである。すると 'visions' が現われ変化するというのである。「風」の調べが 'fancy' の羽搏きを表象しているのではないだろうか。一方、'Imagination' は「飛び去ろうとする幻影を呼びとどめる」(No. 92, ll. 25-26) 力をもつともいう。このように 'visions' と 'fancy' そして 'imagination' とは相互に関連している。従って、次に、'visions' を導くという 'fancy'、そのはかない 'visions' を呼びとどめるという 'imagination' の作用について考察しながら 'visions' との関わりを探ってみようと思う。

詩人は、'fancy's power' によって牢獄のような現実をはなれ、子供の頃の風景を心の眼に映し出すことができるという。しかし思い出の家と荒野の風景の中をさまよい歩く「わたし」は「わが牢獄の門」(l. 44) の閉まる音とともに、ふたたび苦悩の現実に戻されるのである。'fancy's power' には、'truth has banished fancy's power.' (l. 43) とあるように 'truth' に立ち向かうだけの力はない。従って空想にひたり、慰められ憩う時ははかなく過ぎてゆく。この空想の力を萎えさせる障害とは制約された環境という拘束力か、Emily の現実意識あるいは理性であるのか、それとも Emily 自身の存在の限界性を意識する心であるのか。Law Hill School から戻った Emily は「暗い地下牢のなかでわたしはうたうことができない」(No. 77, l. 1) と書くのである。荒野での自由気ままな孤独という恵まれた条件の下で奔放に羽搏いていた空想の力が制約された環境では翼折れ心臓から血を流す鳥のように天翔ることはでき

ないという事を述べているようにも思えるが、この詩が、すでに Emily が牧師館に戻り荒野を駆けめぐり自由を取り戻した後に書かれていることを考えると、「暗い地下牢」というのはむしろ Rod Head, Law Hill での挫折を通して Emily の心の中に芽生えた囚われの意識を表象しているように思えるのである。ただ、この時点、あるいは 'fancy's power' の限界をうたった1838年12月の時点で、Emily 自身がどこまで詩の中でうたった、無意識の深みから浮かびあがる image を意識していたかは不明であるが。

Law Hill での 'a profound spiritual experience' 以後 'power' あるいは「幻なるもの」への欲望が常に Emily の心の中に潜在していたとすると、その失われたものを呼び戻すためにあらゆる手を尽したはずである。事実、Law Hill 滞在中、繰り返し 'power' なるものに、記憶の力、夢想、空想の力を借りて呼びかけているのである。しかし 'Lost vision!' (No. 86, l. 15) を呼び戻すことはできない。それでも詩人は、月が銀色の光を放つ夜、Fancy, come, my Fair love! (l. 5) と呼びかけ 'Tomorrow wake, but dream Tonight.' (l. 4) とうたうのである。これは1843年4月13日に書かれた詩、'How Clear She Shine!' の一部であるが、ここでは、No. 114 の詩のように束の間の夢想、空想にふけろうとする 'dreamer' に 'Reason' が介入し、その夢を障げる、ということは起こらない。

それでは 'visions' を導く空想の力は何によって呼びさまされ作用するのであろう。'To the Bluebell' (No. 100) という詩に 'Thou hast found a voice for me' (l. 9) とあるように、釣鐘草が「夢見る人」の空想力を刺激し、その「ささやき」と「吐息」によって慰めるのである。荒野を遊び場とし、そこに生息する生き物と対話をし、そして、自分独自の世界を創りあげてきた Emily の心の奥に秘む想いに語りかけるのが自然であるのは当然のことであろう。精神的成長と共に空想の場が自分の小さな部屋という空間になり、時が夜と変わっても Emily の魂を目覚めさせるのは風であり星である。Emily は秋の夜風に誘われて夢想にのって遠くまでさまよう気分を満たされることもあった。ま



た、「夜の静寂」(No. 140, l. 32)が「わたしの歌」を呼びさますと告げる「風」についてもうたっている。真夜中、「私」は黙想する。すると、そよ吹く風が‘Heaven was glorious and sleeping earth was fair’(No. 140, l. 7)と告げる。そのささやき、やさしく歌いかける「風」の執拗な誘いを、「その調べが私の心にひびく力があるとは思ってはいけない」(l. 19-20)と言って「私」は斥けるのである。

1841年5月16日の詩には Shall Earth no more inspire thee, / Thou lonely dreamer now? (No. 147, l. 1-2)と Emily はうたうようになる。大地も風も昔のように夢想あるいは詩的想像力に働きかけてはくれない。それでも「わたしの風」の他に「孤独な夢見る人」を「祝福できるものはいない」というのである。自然のささやきが Emily の心に靈感を与えることができなくなったとすると、空想の力に導かれる vision(s) が現われるはずがない。それでも Emily の心は、自然との決別に微妙なるためらいをみせる。ここから囚われている自然の精霊 ‘spirit’ (No. 148, l. 13) という image が生み出されていったとも考えられる。この ‘spirit’ は空想を刺激するのである。

さらに、‘A Day Dream’ (No. 170) という詩においても、自然の与える歓びも ‘vision’ も虚しく ‘unreal’ であることを暗示する内容がうたわれている。「私」は「灰色の岩」と共に夢想にふけるのであるが、その中で、‘When winter comes again, where will these bright things be’ (l. 25-26) とあるように、冬が来ると木々や喜々としてさえずる小鳥たちはどこに行ってしまうのかと問う。そしてその答は ‘All vanished, like a vision vain, an real mockery!’ (ll. 27-28) である。

子供時代には、「荒野に手足をのばすとヒースの寝床も天上の光輝で飾られ息も神々しい火花でみちる」、すると精霊たち (‘spirits’) が歌いかける、と詩 (No. 140) にうたわれているように、自然との親交の中で無理なく神の啓示の祝福を受けることができた。このような子供時代の輝きを成長した後によみがえらせるためには自然の輝きをにぶらせる経験世界での理性の働きによらず、

空想の力によって、その力を強化し拡大することによって、そこに神秘的光景を映し出そうと努めなければならない。‘Fancy still will sometimes deem / Her fond creation true’ (l. 71-72) という詩句から、‘visions’ や ‘dreams’ や、自然と同様 ‘fancy’ が ‘unreal’ であることを否定することができない Emily の微妙なる懐疑心を読みとることができる。この懐疑は ‘To Imagination’ (No. 174) という詩にも影をおとしている。

この詩において Emily は ‘Imagination’ とはいかなるものであるかを明らかにしている。詩人は ‘Is human love so true?’ (No. 172, l. 23) とうたったが、数ヶ月後、‘Imagination’ に「私の真実なる友よ」(No. 174, l. 5) と呼びかけているのである。それは日々の労苦や孤独を慰めてくれるだけでなく、絶望した時に「より輝かしい希望」(l. 36) となるのである。しかしその ‘benignant power’ を飲んで迎えはするが、‘I trust not to thy phantom bliss.’ (l. 31) とうたっているように、想像力の与える至福を信じないという。しかしながら、「夢」のはかなさ ‘真理’ の前では微力な ‘fancy’s power’ に対し、‘Imagination’ は「病む春に新たな輝きを甦らせ」「死から、より美しい生を呼び醒す」力を持つばかりか、‘And whisper with a voice divine / Of real worlds as bright as thine.’ (l. 29-30) とあるように「真実の世界」についてささやくのである。しかもその声は「神聖である」という。その上、それは心の内なる世界で「詩人」と「自由」と共に絶対的主権をもつというのであるから、現実に踏みじられる「空想の花」に比べるとはるかにその力は強大であると言える。ここから fancy のもつ力の限界を嘆いていた Emily の内なる力に対する認識に変化が生じたことを読みとることができると思う。これは、Emily が ‘guile and hate and doubt’ (l. 9) そして、‘cold suspicion’ (l. 10) に満ちた世界、太陽の光もいづれかげり燃ゆる草木もいづれ枯れ朽ちてゆくという変容する世界として「外の世界」を捉え、その世界を斥け、「内なる世界」へと探求の眼ざしを向けはじめたことと無関係ではありえない。翌月に書かれた詩 (No. 176) では ‘phantom thing’ (l. 24) である ‘God of visions’ (l. 39) への

Emily の絶対的傾斜，信仰心というものが読みとれるが「真実の世界」について知るもの，そして語るものとしての「想像力」への想いの中にこのきざしをみることもできるように思う。しかし依然として，信じることへのためらいも読みとることができる。いかに Emily の懐疑心が根の深いものであり，Emily の心の中の対極性が和解され難いものであるのか知れよう。外の世界に失望した詩人が最後に望みを託す世界，それが「心の内なる世界」である。その世界の絶対的主権者である 'Imagination' への懐疑は，とりもなおさず，自己の内なる力への不信感を意味する。そこから自己自身の真実の姿を，懐疑という大気に包まれた薄暗い世界で模索している Emily の姿が見えてくるようである。

Emily は 'fancy' の力によって現われる幻影も 'Imagination' の力によって映し出される神秘的光景も合理的知性や「経験が教えてくれた」自己の限界性に障まれて，信じることができなかったと言えよう。また，'Imagination' には，「飛び去ろうとする 'visions' を呼びとどめる」力はあるが，じっと止まることなく見え隠れする幻，群がりじらす 'visions' を統一する力をもっていない。ところが No. 176 の詩では，'God of visions' ということばが示すとおり，統一の方向づけがなされており，しかも詩人は，「理性」をきっぱり斥けて 'God of visions' に魂を捧げることを決意したとうたっている。No. 174 の詩は1844年9月3日そして No. 176 は1ヶ月半後の1844年10月14日に書かれている。この間の変化は注目に値する。信じることの障げとなっていた理性の冷笑，蔑みをはねつけ，「常に実在する」'phanton thing' を無条件で受け入れ，'God of visions' への信仰を表わしているからである。その 'God of visions' とは「輝く瞳を持つ」'radiant angel' (1.9) とか 'my slave, my comrade, my king' (1.25) と「わたし」から呼びかけられているものであり，「敗北」(1.3) を蔑み嘲笑する「理性」の牙から「わたし」を守護してくれるものである。この「神」を形容する 'bright eyes' (1.1) 'radiant angel', 'ever present, phanton thing' (1.25) という表現は，'My comforter' (No. 168) そ

して 'Spirit' (No. 181) を想起させる。また、断片を一つに統合する力を獲得しつつあることを示唆する 'God of visions' という表現をとっても、統一力をもつ 'Spirit' への方向を示しているように思われる。Imagination から、'God of visions' へ、'Spirit' そして No. 190 にうたわれる 'vision'、そして最後に 'God within my breast (No. 191, l. 5) へと Emily の観念の糸はつながっている。それは完全なる解放のヴィジョンをめざして、あるいは自己探求の完成をめざして発展し深まりをみせてゆく。

この 'spirit' ということばは1839年1月12日の詩 (No. 95) には 'a shadowy spirit' (l. 24) として認められる。これ以前にこの 'a shadowy spirit' と 'a sterner power' の橋渡しとなるようなイメージがうたわれている詩 (No. 82) があり、その詩の中に 'I saw an eye that shone like thine;' (l. 2) という詩句があり、'Spirit' の光輝く眼ざしをおもわせる。また、そのまなざしは、'a stern glance' (l. 4) とあるように厳しく、しかしそれにもかかわらず 'a dream like comfort' (l. 5) を与えてくれるということから Law Hill 時代の詩に描かれた訪問者 'a sterner power' をも想起させる。また No. 95 の 'a shadowy spirit' もこの訪問者の系譜に属するのではないかと思われる。真夜中、「わたし」は山の頂きから迂りおりるように 'a shadowy spirit' が近よるのを見るのである。その姿は「波うつ髪をあらわな肩に垂らし」(l. 25) 月のまわりの「雲のように輝き」(l. 26) 音もたてずに歩くのであるが、それは一瞬のことで、白くきらめいたかと思うとたちまち消えて見えなくなってしまうのである。一瞬のでき事であるにもかかわらず、はっきりと 'I saw ...' (l. 24) と述べていることは興味深い。この詩に描かれた 'spirit' についての鮮やかな image から判断するに、この「わたし」が Emily 自身であることもありえないことではない。そうであれば、Emily は Law Hill での体験以後幾度かこのような幻視体験と呼ばれるような体験をしたことも考えられるし、このような訪問者との出会いがあったとすると、その衝激は大きく、強烈な印象を残したと思われる。Emily 自身が現実にこのような体験をこの時期にしたかどうか

かは別にしても、このような体験の謎、その意義を明らかにしようと努めたであろうことは、さらにその後の詩の中にも 'spirit' についての記述がみられること、しかもその存在は一層重要性を増してきていることから推量することができると思う。

約2年後の1841年7月6日の詩（No. 148）には 'spirit' について詳細な描写がみられる。

And thou art now a spirit pouring  
Thy presence into all ——  
The essence of the Tempest's roaring  
And of the Tempest's fall ——

A universal influence  
From Thine own influence free ;  
A principle of life, intense,  
Lost to mortality.

Thus truly when that breast is cold  
Thy prisoned soul shall rise,  
The dungeon mingle with the mould ——  
The captive with the skies.

(No. 148, ll. 13-24)

'And thou art now a spirit ...' とあるように「あなた」とは「あらゆるものにあなたの存在を注ぎこむ精霊」であり、「変わり果てた頬」をもち、「燃えたつまなざし」をそそぎ、ほとんどことばを口にしないものとして描かれている。それは空想を刺激し、自由奔放に羽搏くことができるようその翼を解放し「消え去ることのない美しい想い」を呼びさます。「幻」は空想によって導かれるわけであるから、'spirit' は vision(s) を導く「力」を解放するものであるということになる。事実それは「宇宙の感化力」と呼ばれているように、ある

「力」(解放力)をもつと言えよう。しかし、同時に、それは死によって解放され自然と隔合するという内容や、「おまえ自身の力から解き放たれた宇宙の力」と言われていることからわかるように、囚われてもいる存在なのである。一体何によって精霊は囚われており、何が精霊のもつ宇宙の力を解き放つのであろう。死によってその「囚われの魂」が立ちあがり自然あるいは宇宙と一つになるということは、Emilyにとって、肉体の牢獄とは制約された実存の状況を表象するわけであるから、人間であることの限界を打破することによって「精霊」は囚われの状態を脱し、限界という壁の彼方のもとと隔合することであると思われる。またこの詩は「精霊」が「あなた自身の力」によって囚われているということも暗示している。この「あなた自身の力」が空想あるいは想像力の活動を抑制、排除し、Emilyの内なる対立性をかきたて、究極的解放への道の障害となっているものであろうと思われる。要するに、自己自身が自己の解放にとって最大の障害であるということ、従って囚われの魂を解き放つことができるのは他ならぬ自己自身であること、そしてその力は外的解放力をもつ存在に求められるのではなく、自己自身の内部に、知覚されず秘んでいるその力にこそ求められるのであるというEmilyの自己認識をこの詩は映し出しているのではないだろうか。spiritのもつ概念が「訪れる者」からEmilyの内なる「力」へと深化したことからもそのように推測できるのである。'The Visionary' という詩の Chorlotte の手になるとと思われる部分に 'What I love shall come like visitant of air, / Safe in secret power from lurking human snare;' という詩句がある。「人の心に潜んでいる罠から秘密の力を得て逃がれ出て風のように訪れる」'Strange Power' とこの 'spirit' とはいずれも内なるものによって捕われているという点で非常によく似ている。

また、さらに 'spirit' を思わせるものが 'My Comforter' (No. 168) である。それは人々の眼にみえず「わが魂の奥深くに隠れ」(1.6) て闇に屈服されずに輝く光であるという ('Spirit' の「光輝くまなざし」(No. 181) を連想させる)。また、それは「隠れたる想い」をかきたてるものでもある。No. 148 の詩にう

たわれた 'spirit' の作用と、この点において共通している。「わたしの魂が何を秘めているかわが魂の奥深い本質のみが知るであろう」という詩句を 'My Comforter' とは「わが魂の奥深くに隠れ」ている「光」であることとあわせて考えると、わが魂が秘めているものがその「光」であり、あるいはわが魂の中にこそその「光」は在り、その「光」を見る（すなわち知る）ことができるのも「魂の本質」をにおいて他にはないということの意味していると考えられる。Emily は後に (No. 188 の詩において)「未知なる永遠の奥深きところにある」(1. 34)「あるべきものの姿」(1. 36)を 'My Spirit' (1. 35)に探求させようとうたう。この 'Spirit' が 'My comforter' をさらに発展させた image であるとする、'soul' の中において闇に屈せず輝き続けるその「光」に、さらに「奥深きところ」「未知なる」ところにある 'what is to be' を照らしださせようということになる。そしてこの「光」の存在、その在り処を知るものはわが魂そのものということであるから、その「あるべきものの姿」を見出すためには、まず自己の魂と向きあわねばならない。さらに自己の深淵へと降下し、「未知の永遠へと欲望の錨を下ろし」(No. 188, ll. 33-34) 自己の存在の秘密を探り出そうと努めなければならないと Emily はうたっているように思われる。

一方、'My Comforter' (No. 168) という詩には次のような詩句がある。「わたしの魂は天使の歌と悪鬼の呻きの相混じった調べを呑みほした」(1. 23-24)。Emily の詩には天国と地獄、光と闇、天使と悪鬼、力と意志といった心の内の対立を象表するようなことばが目につくが、これも、二重性を超えようとする意識の表われととることでもある。このテーマは後の詩 (No. 181) において、より一層鮮明なイメージで繰り返される。魂が呑みほした「天使の歌と悪鬼の呻き」は不協和音を鳴らし続けたらしく、この詩では、「天も入れることのできない神々がわたしのうちでせめぎあい戦っている」(1. 19-20) と Emily は嘆く。心の中の諸々の対立が止揚されてはならず、従ってその対立を表わす断片的 image が統一的全体像をむすばない。しかし、この詩においては、分離を超える力、統一する力あるいは統一的 vision へと導く力をもつ存在と

して 'Spirit' が暗示されている。その 'Spirit' の 'glorious eye' (l. 45) を求める烈しきは、対極性を和解させよう、対立を超えようとする必死さと重なりあうように思う。そしてこの願いは、「わが天国」を目の前にして地獄の苦しみ悶える Heathcliff のように天国の至福と地獄の苦悩を一瞬のうちに体験した囚人をうたった詩 (No. 190) を読むと、成就されたことがわかるのである。その詩の一部を引用してみよう。

And robed in fires of Hell, or bright with heavenly shine

If it but herald Death, the vision is divine (No. 190, ll. 91-92)

「それが死の使いであろうと、その幻影は神聖である」という表現は、「幻なるもの」への欲望と懐疑の間を揺れ動いてきた詩人の不確かな信頼というのではなく、断固たる信仰への意志というものを伝えていることと同時に、群がり変化し続けた 'visions' のざわめきが静まったという印象を与える。引用した箇所は、顕現した「真実」が一瞬のうちに消滅し、囚われているという意識の地獄の中で苦悶に攻めたてられたという囚人 Rochelle の告白する内容の後に続く詩句であるが、この引用した詩には、悲嘆や激しい苛立ちの感情や胸のざわめきの跡がみられないこと、そして、これが注目されてよい点であると思うが、'visions' から 'vision' という単数形へと変化していること、を考えあわせると、Emily のなかの神々の闘いは終わり、完き静寂が訪れようとしていること、心の全体性を獲得しつつあるということを感じさせる。

'... the vision is divine.' と言いきるには、しかるべき理由があるはずであるが、それはすでに言及した体験、人の眼には「見えざるもの」が顕現したこと、すなわちそれを「見た」という体験に求められるだろうと思う。これは 'Gondal' の人物である女囚によって語られる体験であるという設定にはなっているが、作者 Emily の体験とのつながりを強く意識させずにはおかない。

Then dawns the Invisible, the Unseen its truth reveals ;

My outward sense is gone, my inward essence feels —— (ll. 81-82)

とあるように、「隠れたるもの」の真実の姿を捉えたものは「わが内なる精髓」



である。実在は外的感覚を超えた領域まで導かれなくては捉えることができないものであり、それは可視領域の彼方にあり、従って、外的存在として「見」られるものではなく、内在するものであり、感じられるものであるということ。を女囚の体験は暗示している。‘spirit’の「輝くまなざし」を求めて「天国を、地獄を、そして大地や大空」(No. 181)を生涯探し続けてきたと Emily はうたったが、それ以上に深淵なるものを自己の内なる世界に見出したのである。すなわち、自己の魂の奥深くに秘む未知なるもの、永遠なるもの、知られざる神性を。それは、自己の存在の奥深きところに迷いながらも本然たる自己を求めて歩み続けた Emily にこそ与えられてしかるべき最高の祝福といえよう。そしてついに Emily は1846年1月2日「わが内なる神」(No. 191)との隔合の恍惚境を曇りなき声でうたうことができたのである。

ここに至るまでの、苦しみに満ちた自己探求の道程には、Emily が詩の中で表現を与えた様々の image が散りばめられている。それぞれに異なる光を放つ image の一つ一つが Emily が自己の中心へと近づくにつれ、変化し、より深淵なる真実の世界、永遠なる世界を映し出すまばゆいばかりの統一的 vision へと収束していったと思うのである。その完全なる vision を見たいという、Emily の詩の中から聞こえる魂の叫びは、人間性の限界を超越し、‘an existence of yours beyond you’<sup>7</sup>を獲得し飛翔の夢を実現しようとする Emily の意志を響かせて鳴りやまない。

#### 註

1. C. W. Hatfield の説明によると、‘Visionary’という詩の13行目から8行にわたる詩句は姉 Charlotte によって付け加えられたということになる。それが事実であるとすると、Charlotte は、Emily が「幻を見る人」とであると理解していたのであろうと考えることもできる。
2. Phyllis Bentley, *The Brontë Sisters*, Longman, 1950, p. 7.

3. Winifred Gérin, *Emily Brontë: A Biography*, Oxford Univ. Press, 1971, p. 87.
4. 本稿において詩からの引用はすべて次の版を使用した。 *The Complete Poems of Emily Brontë*, ed. by C. W. Hatfield, Columbia Univ. Press, 1941.
5. Winifred Gérin, *Emily Brontë: A Biography*, p. 85.
6. Edward Chitham, "The Development of 'vision' in Emily Brontë's Poems," in *Brontë Facts & Brontë Problems*, by Edward Chitham and Tom Winnifrith, 1983, p. 122.
7. Emily Brontë, *Wuthering Heights in Life and Works of the Sisters Brontë*, vol.5, The Haworth Edition, AMS Press, New York, 1982, p. 84.